
SSC ~ School Support Club ~

master

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SSC School Support Club

【Nコード】

N7277M

【作者名】

master

【あらすじ】

成沢 春樹は生徒支援部（SSC）の一員。

SSCは日々学園の生徒からの相談を受け続けている為、伝統的に部員に好意を抱く人も少なくない。

春樹はある事情により恋愛御法度であるが、ある条件を満たす事が出来れば恋愛する権利を得ることができる。
春樹は恋愛する権利を得る事ができるか？

プロローグ

・・・冷静になれ、オレ。

これは一体どういうことだ？

何でこんな事になっている？

ここは一体全体何処なんだ？

イヤだから・・・落ち着けよ。疑問符ばかりじゃ状況が確認出来ないじゃないか。

まず、オレの名前は成沢なりさわ 春樹はるき。
しりつなおえがくえん私立直江学園の本校の2年生だ。

・・・よし、自分の事が分かる程度には冷静になれた。

そして、目の前には幼馴染である立川たちかわ 梨乃りの。

ここまでは良い・・・だが問題はその距離だ。

どう見ても三角定規一個分より近い。

ほんの少し動けば、ただそれだけで触れてしまう距離感。

長い付き合いでも、こんな距離で見るのは初めてだった。

「おい梨乃。これは何なんだ」無駄と思いつつ聞いてみる。

「何なんだ、って何がかな？」とぼけた顔で聞き返す梨乃。

「この状況は何なのか、を聞いてるんだ」

「そんなの私を知りたいよ。だってここに連れて来たのはハル君だよ？」

「・・・は？」連れて来たのが・・・オレ？

イヤ、そんなことは無い・・・と思う。

イヤイヤ、オレはそんなことした憶え無いんだからありえないだろ。

イヤイヤイヤ、でも梨乃がそんな面倒くさい嘘をつくとも思えないよな。

イヤイヤイヤ「もういい加減辞めたら？」妙に上気した呆れ顔で突

っ 込んできた。(・・・どうでもいいが心の中に突っ込みを入れるのは辞める。)

「じゃあ質問を変えよう。なんでお前はそんな距離に居て、オレは押し倒された形になってるんだ？」

そんなことより、と言ってさらに顔を近づけてくる梨乃。

「そんなことよりって・・・うわ、近い近い!!」一体何なんだ。

これはいつもの梨乃じゃない。

そもそもオレがこんなギャルゲーみたいなシチュエーションに直面するはずが無いだろう。

そうだ！これはきつと泣きゲーとして有名な某ギャルゲーのように夢オチなんじゃないか？

神様がオレの今までの人生を評してオイシイシチュエーションを用意してくれたんだな。

フツ、いくら夢オチとは言え粹な計らいをするじゃないか。神よ。

・・・なら、この目の前に広がっている^{バライン}楽園を存分に満喫しようじゃないか。

据え膳食わぬは武士の恥と言っし、それが神によって据えられた膳ならなおさらだ。

そう思った瞬間・・・オレは。

不敵になった。

無敵になった。

イヤ、神だ!!!

梨乃は目の前で目を閉じている。・・・よし。

「いったただつきまゝす!!」

ガン!!!!!!

「痛エ!!!!」思わず叫ぶ。

何か硬いものにぶつかった。

それは分かった。

だが真つ暗で何も見えない。

どうしよう。

何が起こったのか分からない。

「……あまりのショックに箇条書きになってしまった。

「痛エー！！じゃないよ。早く起きてよ。もう何回も起こしてるんだよ？」呆れた顔で立っている梨乃。

「……なんだ、夢の続きか」ホツと胸を撫で下ろす。どうやらさっきの硬い感触は気のせいだったようだ。

「何の話？夢って」呆れた顔から怪訝な顔へと変わった。……あれ？そういえばいつ立ったんだ？

考えを巡らせていると、

「じゃあ、着替えたら降りてきてね。ご飯作ってるから」と言っ部屋から出て行った。

・

・

・

ああ！夢から覚めたのか！！

やっと気づいて、溜息を吐く。……結局何も出来なかった。

夢才チはともかくタイミングを考えて欲しい。

ま、考えてもしようがないか。

大きく伸びをしてからもう一度溜息を吐いて、オレは着替えを開始した。

いつもの登校

「じゃ、行ってきたーす」と言つて玄関を出る。とは言つても家には誰も居ないので返事は無い。鍵を掛けてから歩き出す。

その後ろを小さい生物がトコトコとついてくる。

「私、そんなにちっちゃいかな・・・？」本気で落ち込んでいる梨乃。（だから何で心の中を読むんだコイツ）

「なんだ、居たのか。小さくて見えなかった」さわやかに微笑みながら言う。

「え、朝起こしたの私だよね？朝ごはん作ったのも私だよね？その間気づいて無かったの？」ものすごく不安そうな顔をしている。

「何を言っているんだ梨乃。オレを起こしたのは精霊だぞ？朝ごはん作ったのは自分だし。お前寝ぼけてるんじゃないのか？」わざとらしくボケる。

「あ、なんだ冗談か」途端に安心する梨乃。

「な、何で冗談だと思つんだ？」・・・まさかとは思つが。

「え？だつてハル君そう考えたし」やつぱり！！！！

「何なんだ、お前。さつきから人の心を読みやがつて。オレの人権はどうなつちまうんだ！！」大げさに頭を抱える。

「やだ、冗談だよ。ただハル君が分かりやすいだけだよ」にこやかに笑っている。

・・・その微笑みも今では何かを企んでるようにしか見えない。

「何も企んでないよ」・・・もうイヤだ・・・

「こんな人権無視したチートキャラ、誰が考えたんだ！！そいつはきつと史上稀に見るクソ野郎に違いない！！！」

こんな事言つたら自分の身に何が起こるか分からないが、この不条理を嘆かずにいられようか。

「だから冗談だつて。長年一緒に居るんだからある程度考えてる事

くらい分かるよ」

ゴメン・・・オレには梨乃の考えは全く分からない。

「でも、本気で思ってるの？」心配そうに聞いてくる。

「え、何が」

「私がちっちゃいって」

・・・なんだその事か。

「思ってたねーよ」これは本当だ。実際梨乃はそんなに身長が低い。

むしろ女子にしては高い方だと思う。ただ、細すぎるせいで小さく見えるが。

「良かった」本当に嬉しそうに笑う梨乃。

それにしてもやっぱり梨乃は心が読める訳じゃないんだな。

まあ、そうだよな。完璧に心の読める人間なんていたら、オレは人生投げ出してしまいかも知れない。

それがもし梨乃だったとしたら、今までの心のほとんどを読まれてる事になるから、“かも”じゃなく確実に人生を投げ出すだろう。そう考えると、梨乃をそういう風にしなかった人に感謝しなければな。

さつきはクソ野郎とか言つてすまなかった。本当に悪いと思ってる。むしろ史上稀に見る人格者だと、言わせてもらおう。

「そうそう。そう考えた方が良いよ」

・・・

・・・

・・・心折れそう。

しばらく歩いた所で、見慣れた顔を見かけた。

「抜き足、差し足、忍び足」と足音を殺して背後から近寄る。

梨乃は不思議そうな顔で見ているが、気にしないことにする。

あと3mほどに迫ったところで、

「何をやっているんだ。春樹」今まさに驚かせようとしていた奴に声を掛けられる。

「やっぱりお前を驚かすのは無理か」苦笑しつつ言ってみる。

「俺に気づかれずにこんなに近くに来れるとはな。お前の気配の消し方もなかなかだぞ」後ろを向かずに返事が返ってくる。

「また気配の消し方教えてくれよ。次からは絶対にばれないようになりたいし。というか、お前なんでオレだって分かったんだ？こっち見てないのに」

「気の流れた」自信満々にそう断言する。意味が分からない。

「あつそ。ま、一緒に行こうぜ」分からない事は流しておけばいいさ。

紹介が遅れたがコイツは西園寺 さいえんじ 健太 けんた。無駄にカッコいい名字と果

てしなく平凡な名前を持つ格闘オタクだ。今までの会話からも分かるように、気配や気を探る方法を教える事ができるほど武道を極めているらしい。

「そういえば今日は小テストがあるな。勉強はしてきたのか、春樹よ」

「ん、イヤ特にはしてないけど」と言うか全くしてない。それどころか、「今日って、テストあったっけ」という有様だ。

「あるよ。数学と物理と英語。合格点取らないと再テストになっちゃうよ。まあ、ハル君には関係無いけど」

「確かに。春樹は頭だけは無駄に良いからな」妙に頷く健太。

「オレをモヤシみたいに言うんじゃないよ」嫌そうな顔を作って否定してみる。

「でも、実際勉強できるじゃない。授業は全然出てないけど」ダメだよ、という顔をして言ってくる。

「……………」

「何急に黙ってるの？」……イヤ、ただいつまでこの感じが続くのか不安なだけだ。

このままじゃいつまで経っても話が進まないじゃないか。

こんな意味の無い会話を聞かせられたところで、きつと読者は飽きてしまうだろう。

さっさと場面転換したい。いつもは短く感じる通学路もとても長く感じる。校門よ、早く姿を現してくれ。

それともアレか、読者を飽きさせてでも伝えたいことがこのシーンにあるというのか。

……だつたら箇条書きで良い。早くこの会話を終わらせてくれ。誰でも良い。悪魔でも……

「ハル君は頭が良くて何でもできる万能型の天才だということ。ハル君は授業サボりの常習犯だということ。私はハル君の世話を焼いているということ。健太君はあまり勉強が得意じゃ無いこと」

……スラスラとどうもありがとう。

なんだろう、今の梨乃はなんか、こう……別の世界からの干渉を受けているような気がするな。

ほら、伝えたいことが伝えられたから、（多少無理矢理でも）校門が見えてきた。実に単純だな。

なんて、無駄話や無駄な考えを巡らせながら、今日もオレたちは校門をくぐる。

SSCメンバー集結

「ダメだな」仏頂面で話しかけてきた。

教室に着いてカバンを置いた瞬間に一体何なんだ。

「何がだ？何の前振りも無しじゃ分からねえよ」こっちも仏頂面で返してやる。

「色々言いたい事はあるが、順を追ってダメだししてやろう。まず、あのプロローグだ。あれは何なんだ？まんま某ギャルゲーの出だしじゃないか。少し設定を頂くくらいならまだしも、お前の自問自答のくんだり、あれほとんどそのままじゃないか。そこまでするなら、タグにちゃんと付けておけよ……おい、聴いてるのが成沢」

「お前は一体何を言っているんだ」全く訳が分からないからどう返せばいいか分からんじゃないか。

「何って、だからダメだしだよ」……ダメだ、会話にならん。

「お前は時々意味不明な事を言い出すよな」本当に。

「何を言う。次元を超越していると言え」……どうやらコイツはいま別の次元の視点から喋っているらしかった。

「もういいだろ。そんなに文句言ったってどうせ何も変わらんだろ」

「イヤ、まだ言い足りないぞ。まだSSCの活動全く書いてないとか。タグにスポーツって付いてるけど早くスポーツしろとか。2話での西園寺の紹介はもっとしっかり素早く正確にとか。タグの数少な過ぎとか。グダグダしてないで話進めろとか。作品紹介で意味深な事書いてるけど、さっさと説明しろとか。そんなんだから感想が少なくて、これを読んでくれる人も少な……」オレは黙って口を塞いだ。

「ちよつと黙れ、それ以上喋るとお前は確実に消されちまう」そう言ってから手を離す。

「待て、一番言いたいことが残ってる。それだけでも言わせてくれ」

「じゃあさつさと言え。ただし、ダメだと判断したらすぐに口塞ぐからな」もし本当にダメだったらぶん殴って止めてやる。そう心に誓ってから、

「さあ、言えよ」とさわやかに笑いかけつつ言った。

「僕を出すのが遅い！！！！」・・・はい？

「えつと・・・何？」

「だから、僕を出すのが遅いんだよ。読者はお前のような屑キャラよりも僕のような魅力あふれたキャラクターを望んでいるのだから！！！！」

力説されても困る。というか自分で魅力あふれると言っただけ・・・というか、

「そんなものオレ達がこうでできる問題じゃないだろ。どうしても早く出たかったならオレの家の前にも張ってるよ」

「そんな事したら凄く出たがっている奴みたいに見えるだろ。そうじゃないんだよ。僕は自然な流れで出たいんだよ。というか、さつさと僕の紹介しろよ。読者はもうそろそろ『コイツ、誰だよ』ってなるぞ」

「・・・もう、どうでも良いや。

さつきからゴチャゴチャ言ってるコイツはあわゆき淡雪 ひょうが氷河。

PCと博打（特に麻雀）を愛する学年一位（仮）の秀才君だ。おまけに小さい頃は外国に住んでいた帰国子女・・・らしい。本当かどうかは知らん。

「それより、立川はどうした。今日は一緒じゃないのか」やつともな会話ができるな。

「あいつは教務室に行ってるよ。何か出すものが在るんだってさ」朝一番で出すとは、真面目な梨乃らしい。

「ほう、そうか。ならば心置きなく作戦を練るうではないか」ニヤリと嫌な笑いを浮かべつつ言っただけ。

「何のだよ。今日は特に依頼無かっただろ」

「イヤイヤ、無いからこそだ。最近刺激が足りんと思わんか？」

「思わない。したがってお前とろくでもない事はしない。大体まだ入ってないだけで、これから依頼あるかもしれないだろ」

「むう、そうか残念だ。まあ仕方ない。立川も帰ってきたところだし、今日はやめておこう。だが僕は諦めない。気が向いたらいつでも声を掛けてくれ」

梨乃が不思議そうな顔をしながら、「ん？何だったの？」と尋ねて来たが、オレは何も言えなかった。

突然だが、少し昔話をしよう。オレには、かつて苦手なものが二つあった。

一つ目は実家の人々。つまりはオレの両親、曾祖父、両親の兄弟（叔父・叔母夫婦）、そして従兄弟。

何故苦手だったかはひとまず置いておくとして、この一つ目は未だに苦手だ。

二つ目は こちらは今では信じられない事だが 女子だった。

もちろん全く話さない訳でも、関わらないわけでも無かったが、それでも常に微妙な嫌悪感があったのは事実だ。（梨乃だけは別だ。）だがこの学園に来た際に つまりは家を出て一人暮らしを始めた時に

ある女と出会い、オレは女子へのイメージが一変した。そしてあるエピソードにより女子への苦手意識を克服するのだが、今重要なのはそのエピソードではなく、ある女・・・つまりSSCメンバーの最後の一人、川柳^{かわやなぎ}花凜^{かりん}の紹介だろう。

その名の通り凜とした見た目をしているのだが、性格はスッキリしている・・・なんか違うな・・・何というか、サイダーっぽい。スカッとして気持ちいいというか。そしてノリが良い。

見た目はどこかのお嬢様のように気品漂っているが、初めて会った人は清楚な見た目とギャップのあるテンションの高さに驚かされる

事も多い。

そして花凜の最大の特徴は、なんといってもその身体能力の高さだ。おそらく学園のどの部活に入り何の競技をしてもエースになれるであろうその身体能力は、おそらく言葉では伝わりきれないだろう。まあ、紹介はこんなところで良いだろう。

SSC（正式名称直江学園生徒支援部）は、オレと梨乃、氷河、健太、そして花凜の五人で活動している。正式に部活として活動しているのではなく、あくまで同好会扱いだ。

活動内容は、名称そのままで生徒の支援だ。物捜しから部活の助っ人、生徒の相談相手と活動は多岐に渡る。

そしてSSCを発足させたのが、何をかくそう川柳 花凜なのである。

その花凜が、始業きっかり十分前に入ってきて、漫画を読んでいた俺に一言。

「早速依頼が来たよ。放課後いつもの場所に集合ね！」・・・朝一番会って第一声がそれかよ。

「分かったけど、いきなりそんな事言うなよ。昼休憩とかでも別に良いじゃないか」わざと嫌そうな顔をして文句をつけてみる。

「あゝゴメンゴメン。朝一で依頼あつてテンションあがっちゃってさ」お前はいつもハイテンションだろ。というか、落ち込んでるところ見たことねえぞ、オレ。

「ほら、さっさと席つけよ。もうそろそろ担任来るぞ」始業までまだ時間はあるが。

「おゝ悪いね、春ちゃん」

「それは止めろって前言っただろ」

「冗談だよ。春樹っち」・・・新パターンできやがった。

「もついいから、さっさとしろ。ホントに担任来ちまうぞ」

「了解」^{ラジャー} 颯爽とそう言って自分の席に着いた。

やっと席に座った。ふう、あいつを相手にすると疲れるな。

というか、依頼来たのか。今日は何もなくて良いと思ってたのに。
・・・一応誤解の無いように言っておくが、別に花凜の事を煙たがっている訳でも嫌いなわけでも、ましてや強制的にSSCに入れられているわけではない。

むしろオレは 誤解されるのを承知で言うが 花凜の事が大好きだ。大大大大好きだ。感謝もしてる。

まあ、これは他のSSCメンバーにも言える事なので（本人たちにはもちろん言わない。あと断っておくがオレはノーマルだ。そういう趣味は無い）別に花凜が特別というわけではない。

そして、SSCだ。オレは自分の意思でSSCに入っている。まあ、それも事情があつての事なのだが、少なくともSSCメンバーのせいではなくオレ自身の問題である。

・・・まあ、それもおいおい語っていくとしよう。

目下の懸念事項は、放課後の依頼だな。

今日もまた、一日が始まる。

Request:1 スタート(前書き)

やっと本編スタートです

Request : 1 スタート

放課後になった。

言われた通りにいつもの場所（俺たちの教室である2・B）に集まる。（というか居座り、残っている。部活ではなく同好会なので部屋が無いのだ。）

依頼の前に、SSCのルールを説明しておこう。

- ・基本的に依頼には全員で全力で取り組むこと。
- また、決して依頼された内容を超えてはならない。
- ・同時期に複数依頼が来た場合は、担当者を決め活動に取り組む。
- また、活動は先に依頼のあったものを優先する。
- ・やむを得ず活動に参加できない場合、依頼の内容を聞くことを許可しない。（依頼を聞いた場合必ず参加しなければならず、途中で抜ける事も許されない）
- また、自分が参加しない依頼については一切の口出しをしない事。
- ・途中参加する可能性のある場合も、参加が確実でない場合は依頼を聞かない。
- また、途中参加した場合はメンバーから依頼の説明・依頼主への紹介をされること。

この四つだ。

分かりづらいものもあるが、つまりは依頼主のプライバシーを守りつつ全力で依頼をこなせ、ということだ。

さあ、今日の依頼を開始しよう。

「じゃあ、詳しく話を聞かせてくれるかな。」目の前の女の子に向かって言う。

「あ、はい。あの、私、野球部のマネージャーなんですけど、その今日は依頼をお願いするために来ました！！」目の前の女の子は興奮気味にそう切り出した。

「あ、オレは成沢 春樹です。で、依頼の「内容は、と言おうとしたところで、

「あなたが有名な成沢先輩ですか！！お目にかかれて光栄です！！」

・・・キラキラした目で言われた。眩しいじゃないか。

「あ、ありがとう。それにしても、オレって有名なのか？」

「有名ですよ。先輩から、『あいつは行事壊しの常習犯だ』とか、『あいつは女たらしだ、気をつける』とか、『ボールを投げたら人が死ぬ』とか、『バットを振ったら必ずホームランになる』とか。」

「えーっと、それは誰が言ったの？」さわやかに笑おうとする。・・・が、ちよつと引きつってるのが分かる。

「あの、野球部の先輩です。」・・・あいつらか。憶えてるよ。

「ほらほら、雑談もいいけどさ、さっさと依頼の内容聞いちゃえよ」花凜が言ってくる。

「そうだな。じゃあ聞かせてくれるかな。」

「あの、今週の土曜日に練習試合があるんですけど、うちのエースが怪我しちゃって。それで、その試合はシード権を賭けてるんですけど、ピッチャーが居ないと試合にならなくて。もちろん、他にもピッチャーは居るんですけど、その、今回は練習試合なんでエース一人で大丈夫だと思ってて、他の人はこの試合に合わせて調整して無いんです。それに、やっぱりシード権があるのと無いのではかなり違って来るんです。だから、助っ人をお願いします！！」

最もポピュラーなケースだな、部活の助っ人。土曜日か、明後日じゃないか。

「じゃあ、いくつか確認するから答えてね。」梨乃が言った。マネージャーが頷く。

「その依頼は部活としての依頼なのか、それとも君個人の依頼なの

か、どっちだ。」氷河が聞く。

「えっと、一応部活として、だと思えます。先輩に言われたので。」

「この依頼は、試合に勝てれば良いんだよね？」今度は梨乃だ。

「え、はい。まあ、試合に勝てれば、良いです。」

「という事は別に助っ人無しでも勝てれば良いのか？」次は健太。

「ええ？えっと、良い・・・と思います・・・多分ですけど。」
迷いながら答える。

「この依頼をこなす為に、我がSSCが練習に参加しても良いんだよねっ？」花凜が尋ねる。いつもより歯切れが良い。運動系の依頼だから嬉しいのかもしれない。

「はい、それはもちろん。今日からでも良いって。」

「・・・」最後はオレか。まあ、別に聞かなくても良いんだが。
・・・そうだ。

依頼にはあまり関係ないけど、と前置きしてから

「エースの怪我は大丈夫なのかな？」と聞いてみた。

「あの、大丈夫です。怪我と言っても捻挫ですから。一週間もしたら球も投げられますよ。」

「そう、なら良かった。」

これで確認は終了だ。

「あの、それで、引き受けてくれますか？」上目遣いに尋ねてくる。うわ、またキラキラしてるよ。

目で他のメンバーに尋ねる。・・・断る気は無さそうだな。

「もちろん。すぐにグラウンドに行くから、先に行って伝えてくれるかな。」

そう言うのと、良い笑顔で

「ありがとうございます！！！」と言って走っていった。

Request:1 グラウンドにて part:1

オレ達は今回の依頼について簡単に打ち合わせをした後、ジャージに着替えてグラウンドに向かった。

「よう成沢、待ってたぞ！」妙に体格の良い野球部員がバシバシ背中を叩いてきた。

「・・・痛エな。」

「ここの依頼は久しぶりですね、田端先輩。キャプテンはどこですか？」そう。野球部に来るのは初めてでは無い。この田端先輩の事も以前の依頼で知っている。

「おいおい、主将は俺だぜ、成沢！！忘れたのか？」

「あ、そうでした。すいません、忘れてました。じゃあ、田端キャプテンに今回の依頼について確認させてもらいます。」

「成沢、前も言っただろう、キャプテンとか主将とかつけないでくれって。」

「じゃあ、田端さん。今回の事ですけど、」

「お前らに全面的に任せる。前回までの事でお前たちの力は分かってるからな。なんなら試合までの練習もお前らが指揮を執ってくれても構わん。」

「・・・速いな。確認することも無いじゃないか。」

「早速ですけど、全員集めて貰えますか。実力を確認したいんで。」

「おう、少し待ってる。もうすぐ着替え終わると思う。・・・あ、そうだ。」

おおっと、何なんだ？急に近寄ってきた。

「な、何すか。」少し慄きながら聞く。体格いい奴が近寄ると超怖エ。

「一年生はお前らの事知らないから、ゴチャゴチャ言うようなら去年と同じ方法で黙らせても良いぞ。今年の一年は生意気だからな。良い薬になるだろう。」

・・・別に小声で言わなくても・・・というか、
「そんな事、言われなくてもやるつもりですよ。」オレはさわやかな顔でそう言った。

五分経って、野球部が俺 残りのSSCメンバーは野球部の後ろだ の前に集まる。

「二年生以上は知ってると思いますが、オレはSSCの成沢 春樹です。依頼を受けて助っ人に来ました。」

二年生以上は黙って聞いている。一年生は疑問があるような顔をしているが、無視して続ける。

「依頼の内容はシード権を賭けた土曜日の練習試合に勝つことです。その為に練習を見に来ました。」

じゃあ、実力を確認したいので最初にテストをします。」

「質問です。それは誰が依頼したんですか？」一年生らしき奴が質問する。

「それは、野球部全体だ。正確に言えば二年以上の全員だな。」田端先輩が答える。

・・・この機会に質問全部捌いとかか。^{さば}

「他に質問ある人いますか？」

「あの、テストって何をするんですか？」この質問も一年だ。

「普通ですよ。守備練習、走塁練習、打撃練習、投球練習の四つです。投手じゃない人は投球はしなくても良いですけど、受けたい人は受けても良いですよ。良い結果が出たら試合で投げられるかも知れません。」

「お前、腕落ちてないだろうな。」同じクラスの矢沢^{やわ}だ。そういえば野球部だったな。

・・・それは質問じゃないだろと思ったが、まあ良い。答えよう。
オレはニヤリと笑って、

「当たり前だろ」と言った。

一人一人テストをこなしていく。野球部のリストは氷河が作った。
「田端さん、このメンバーでどうですか？」テストもかなり終わりに近づいたときに仮想メンバー表を作って、見せてみる。

「どんな感じだ？・・・何？お前たちの名前が無いじゃないか。」

「イヤ、一応ですよ。野球部も助っ人無しで勝った方が良いでしょう？」

「ん、そうか。他は・・・何で投手のところは空いてるんだ？」

「それは今テスト中ですから。」

「なるほど、他は・・・まあ良い。今回は任せてるからな、口出しはしない。」

「じゃあ、これをベースにしてメンバーを組みます。」

・・・そして、全員のテストが終わった。

「次に、紅白戦を・・・」と言おうとした時、

「聞きたい事があるんですけど」若干ガラの悪い一年生が聞いている。

「あのさ、俺達全員テストしたけど、あんたはどうなんだよ。テストしねえのか？というか、あんたさっきから偉そうに喋ってるけど、野球できるの？」

・・・来たか。去年よりタイミングが早いな。確かに生意気だ。実力で捻じ伏せてやろう。

「ふゝ、なら君自身と勝負しよう。それでオレが勝ったら文句無いだろう？」

「良いッスよ。オレ野手なんでバッターやります、一打席で十分ッスよ。」

「一打席で良いのか？後悔するぞ。」・・・今からこの生意気なガキをボコボコに出来ると思うとニヤけちゃうな。

「見ててください、先輩。俺、打ちますよ！！」野球部の全員に言

った。一年生達は本気で盛り上がった。先輩達は笑って返している。
・・・・・この空気も表情も読むことが出来ない一年生は、気づ
かなかったようだ。

先輩達の笑いの中に、哀れんだような、可哀想な者を見るような視
線が含まれていた事に。

Request:1 グラウンドにて part:2

キャッチボールをしながら肩を慣らしていく。

「氷河、もうそろそろ座ってくれ。」大分肩が温まったところで、氷河に座って貰う。

そして、軽く球を投げ込んでいく。

ポスン。

「ヘッ、ショッボールだな。蚊が止まるぜ。」笑いながら挑発して来る。

無視して球を投げ続ける。

ポスン。

ポスン。

「よし、もう良いぞ。打席へ入れ。」呼びかけてやる。

何も言わずに打席に入る・・・意外だな。もう集中してやがる。

「田端さん。審判お願いします。」審判は任せる。田端さんなら誤審はしないだろう。

「じゃあ、さつさと投げちゃって下さい。」・・・いちいちイラストとさせる奴だな。

振りかぶって、球を投げた。

ズバン。

「ストライク！」

インコース低めの良いところに決まった。油断している奴にはまずあのコースは打てない。

悔しそうな顔をしている。・・・何だ、そんな表情もできるのか。

「さつさと次投げろよ。今のは油断しただけだ。」吐き捨てるように言った。

・・・おおっと、さつきと集中力が全然違うな。これはこっちも本気で投げないと。

二球目。

さつきよりも大きく振りがぶる。

奴は集中して構えを取るが、そんなのは関係ない。

力を込めてタメを作り、オレは球を渾身の力で放った。
ブンッ。

空振りの音が聞こえる。

・・・しばらくしてから、

・・・ポスン。

「ストライク。」田端さんは笑いを堪えながら言った。

さつきまで五月蠅く応援していた一年生達が、静まり返った。

スイングしたままで止まっているチャライ一年。・・・まあ無理も無い。初めて見た奴は大体こんな反応をする。

やっと体勢を戻して来たので、言ってやった。

「どうだ。オレの必殺技は。」
ウイニングショット

「何が“ウイニングショット”だ。ただのスローボールじゃねえか!!」怒りながら言ってくる。

「その“ただのスローボール”にお前は空振りしたんだぞ。」ニヤニヤ笑って言ってる。

「ま、まだ後一球あるからな。まだお前の勝ちじゃね〜ぞ。」

「じゃあ、次の球行くぞ。」

「ゴチャゴチャ言わず早く投げやがれ。次は打ってやるよ!!」
三球目。

オレは何も考えず腰を捻った。
ひね

そしてそのまま、ど真ん中に向けて腕を振りぬく!!

ズドンッ!!!

チャラ男（仮）はバットを振ることさえ出来ない。 否、反応
することすら出来ない。

「田端さん、判定は？」白々しく笑いながら催促する。
さいそく

「もちろん、ストライクだ!」

「よ〜っし。これで文句無いだろう?一年坊主。」

・・・黙っている。悔しいのかも知れない。

「おい、成沢。お前、ちよつとは手加減してやれよ。一打席限定で初見なら、打てる奴ほとんどいないぞ。」氷河が口を尖らせて言う。

「変化球投げないだけでも十分手加減してるだろ。」

「最後の一球、あれはダメだと思うぞ。いくらなんでもトルネード投法まで使っなよ。」

「ま、良いじゃないか。一年生への土産だと思つて。」減るもんじや無いし。

「ハル君！！はい、さっきの投球の球速。」梨乃が寄ってきてメモ帳を見せてきた。

「どれどれ、見せてみる。」氷河が奪いやがった。まあ良いや。

・・・なんで無言？

黙ったままメモ帳を突き出してきた。・・・何なんだ。

一球目 1 2 7 k m / h

二球目 6 5 k m / h

三球目 1 3 4 k m / h

うん、何というか・・・やり過ぎだな。ただでさえ必殺技スローボールの後の球は速く感じるのに、最後の球が一番速いとは。

あまり本気で投げないように肩はそんなに温めて無かったんだけど、ま、ともかく。

「じゃあ、これで全員文句無いよな。次は紅」白戦だ、と言おうとした所でまた遮られた。

「まだだ、一打席ぐらいならまぐれかもしれないね」だろ。「しぶといな。・・・正直ウザい。」

「分かった、分かった。じゃあ、残り三打席だ。一本でもヒット性の当たりが出たら勝ちにしてやるよ。」一試合が大体四打席だから、文句は無いはず。

「待った、その中の一打席僕に投げさせてくれないか？久しぶりに投げたい。」

「・・・氷河、そんな事許される訳が」「あ、アタシも投げたい。」
・・・頼むから話を聞いてくれ、花凜。

「という訳で、残りの三打席は成沢、僕、花凜の順番で投げるが、それで良いよな？」有無を言わさぬ迫力で詰め寄る氷河。

「別に良いッスよ。けど、だれか一人でも打たれたら当然あんた達の負けだぜ？」

「もちろん、望むところさ。チャラ男君。」ああ、こいつ完全に潰す気だ。ていうか、チャラ男って言っちゃった。オレでも言うの我慢してたのに。

「誰がチャラ男ッスか。俺には平井って名前があるんだよ。」

「ほらほら、もう良いじゃんそんな事。さつさと勝負しよう！！！」

無駄に朗らかだな。こんな時はそれに感謝するぜ。花凜よ。

平井君は安易にこの条件を受けた事を確実に後悔するだろう。
特に、最後に控えている花凜の球を打席で見たとき、確実に。

Request : 1 グラウンドにて part : 3

結果として。

オレは結局一回も変化球を投げることなくチャラ男を空振り三振に打ち取った。

正直さっきの一打席よりも集中力に欠けていたので楽だった。何故なのか断定は出来ないが、予測は出来る。

おそらく、最後に投げるのが花凜女子だからだ。

こういうタイプの人間は男である事、ただそれだけで女より上位に立っていると考えるという、与謝野のりよ 晶子あきこさんが聞いたら怒り出すような理論を信じている傾向がある。

そんな事だから、所詮女子が投げる球だからシヨボイだろうと高をくくり、最終的に自分の首を絞める事になる。

二打席目の対氷河戦も、そんなこんなで集中力は皆無、氷河が投げた変化球にかする事も無く三振に倒れた。

そして、運命の最終打席 否、運命は既に決まっている。花凜の勝ちだ。

一打席目ならともかく、二打席目ならオレの今日の調子（肩もまともに温まってない状態）では打てない事は無かった。

だが、最後に投げるのが女だというだけで気を緩め簡単に三振に屈した時点で勝負は決した。

氷河の球も初見で打てる代物では無かったが、本当にセンスの良い奴ならば打つまでは行かなくとも当てることぐらいは出来たように思う。・・・だが、そこも気を緩めたまま三振。

残念ながら、花凜の球を打つのは不可能だと言って良い。

今日のオレと氷河などとはレベルからして違う。

花凜は・・・本物なのだから。

「すみません、田端さん。プロテクターとマスク貸して貰えますか？」

「ん？ああ、もちろん良いぞ。そうしないと危ないしな。」田端さんは笑いながら言った。相変わらずよく笑う人だ。

「おい、誰か持ってきてやってくれ。」言われて、すぐに一年が取りに行く。教育が行き届いてるな。

キャッチャーマスクとプロテクターを受け取る。・・・何か怖がってるみたいだな。仕方ない。

「ありがとう。助かったよ。」自分に出来る最高の笑顔を一年に向ける。

「別に大丈夫ですよ、このくらい。」・・・あまり効果は無かったようだ。

装備を身に付ける。花凜はウズウズした様子でボールをいじっている。

「早く座ってよ、春ぴょん。投げたいんだ。」

「何なんだ、その呼び方。もうちよつとまともに呼べ。」座りながら言う。

「まあ、良いじゃん。春ちゃん。」・・・せめて統一しろ。

「ほら、早く投げて来い。軽めでな。」花凜は分かったような顔をして頷いた。

そして、投げた。

・・・ポコ。

物凄く遅い球がミットに収まった。山形の。

ちよつと緩すぎだな。素直と言うか何と言うか。

「もうちよつと強めで良いぞ。」

「何km/hぐらいで投げれば良い？」ニコニコ顔でそう言う。・・・は？お前調節出来るのか。

「じゃあ、125km/hぐらいで。」そう言うな否や、

花凜はそのしなやかな体を捻り、腕を振り抜いた。
ドン。

心地良い感触が手の中を駆け巡る。

「ゴメーン、少し速かったね。」花凜が謝る。

「梨乃、今の球、何km/hだった？」遠くに居る梨乃に聞く。

「127km/hだったよ。」……………本当に少しだけ速いな。

ボールを返して座る。

ドン。

「今のは？」また梨乃に尋ねる。

「125km/hだよ。」

どうやら。

オレの花凜への認識はまだ甘かったらしい。

「ね。」もう良いじゃん、早く勝負しよーよ。」もうちょっと落ち着け。

「肩はもう大丈夫なのか？」まだ三球しか投げて無いのに。

「大丈夫さ。二人が戦^やってる間に投げてたから。」

さいですか。

「と、言うわけで。もう打席に入ってくれるかな。」ダルそうな雰囲気^{きふき}で打席に入る。

……明らかになめてるな。まあ良い。どうせ打てない。

サインを出す。遊びで野球をする事もあるので、サインはそれを使う。

花凜は頷き、

先程と同じように 先程よりも大きく 体を捻り、要求した

コースに振り下ろす！！

ドボン！！

痛つてー！！！！！！

要求通りのインコース高めに来た花凜の球は、しかし要求以上の球威を持ってミットに収まる。

収まると言っても、その反動でオレの体も持っていかれた。

「テメエ、花凜！本気で投げすぎだろ！！オレの手をブツ壊す気が

「……」叫んで訴える。

「あ、メンゴメンゴ。イヤ、少しなら大丈夫かなって。」悪びれずに笑って言う。

「大丈夫な訳無いだろ……！まだジンジンするわ……！」

「田端さん。今の球どうでした？」人の話を聞けよ……！」

「え？ああ、ストライクだ。ストライク。」田端さんは驚いた顔をしている。前の時も見てるのに。

「なあ、成沢。川柳の球、前より速くなってないか？」

「……」

「成沢？おい、どうした？」

「イヤ、いつも一緒にやってるから分からないんですよ。」もし本当にそうならかなり困る。

「早く次の球投げたいな……」

クソ、本当にオレの手を壊す気が。

サインを出す。一瞬嫌な顔をしたが、首は振らずにモーションに入る。

シュン。そんな音が聞こえてきそうな感じで、球を投げる。

さっきの球よりも遅い。チャラ男もそう思ったのか振ってきた。タイミングも合っている。

……だが。

ミートしたと思った瞬間、球は横にスライドした。

ミットに収まる。

空振りだ。

「ストライク！」田端さんのコール。これでツーナッシング。

花凛はニコニコしている。そんなに体を動かすのが嬉しいのか。三球目。

さっきまでと同じようにサインを出し、花凛は振りかぶる。

さっきまでと同じように投げた。

同じくらいのスピードでボールが迫ってくる。

打席の前で球は大きく沈み、ワンバウンドした。

・・・だが、

「ボール。」

今度はボールだった。

ボール球を振らせようとしていたのだが、振らなかった。

これで終わらせようと思っていたのだが。・・・仕方ない。

「花凜。次はアレだ。」この球はサインが決まって無い。だから口で伝えるしか無いのだ。

「え、アレ？まだ完成してないじゃんかゝ良いの？」

「ああ、良いんだ。八割方完成してるし、実践で使わなきゃ多分完璧にはならないから。」

花凜はそれ以上何も言わずに投球フォームに入る。

体を捻り、しなやかな腕から球が放たれる。

今度はバットを振ってきた。

初球と同じぐらいの球のスピード。振り遅れているが軌道は合っているのでゴロぐらいにはなる可能性があった。

しかし。

バットに当たる直線で鋭く落ちた。

バシン。

「ストライク。」

「よゝっし。これで俺等の勝ちだな。」ん？何か田端さんがこっちを見ている。

「何ですか？聞きたい事でもあるんですか？」

「ああ、その、最後の球、あれは何だ？速くてよく分からなかったんだ。」

「・・・アレは高速低回転ボールですよ。ストレートと同じ速さで投げるんですが、回転をわざとかけないんです。そうすると空気の壁にぶつかって変化するんですよ。」

「ほう、本来回転はかかっていた方が良いものを、逆転の発想であえて回転を減らすのか。よくそんな事思いついたな。」

「オレが思いついた訳じゃ無いですよ。あるマンガで主人公が投げワンナウツ

てたのをマネしただけです。」

「ほう、そうか。ま、平井も今回のことは良いクスリになるだろう。」

「そうなると良いんだが。」

「じゃあ、今度こそ紅白戦しましょう。呼んだ順番に並んでください。」

そして、やっと実力チェックの最終関門、紅白戦を開始した。

Request:1 グラウンドにて part:4

「成沢。もうそろそろ良いんじゃないか？」田端さんが聞いてくる。
「何がですか？」今オレは部員の実力チェックに忙しいので、グラウンドに目を向けたまま言う。

「お前も紅白戦に出て、一年生に実力を見せておいた方が良いんじゃないか？」

「さっきの対戦で実力は示せたと思うんですけど。」チャラ男は、記録を見る限り一年生の中では上手い方だ。

「イヤ、そうなんだが・・・一年生は川柳の方に尊敬を集めてしまっているみたいだからな。お前は結局ストレートとスローボールしか投げてないし、あまりインパクトが無かったと思うんだ。」

「まあ、そうですね。せめてスローボールじゃなくサークルチェンジだったら良かったと思うんですけど。」まあ、そうしたとしても見た目には大差は無い。

「インパクトと言う点では、多彩な変化球を見せた淡雪の方がお前よりも上だしな。だから、どうだ。お前だけでも紅白戦に出たら。」

「うゝん。ま、田端さんがそう言うならやつても良いですけど。花凜も本番では出られない訳ですし。」女子だからな。チーム内での練習はともかく練習試合には出られないだろう。

「まだ、それは分かんぞ。相手チームに申し出て許可して貰えれば川柳も出られる。」

「え？そんな事しても大丈夫なんですか？」

「ああ、あそこのチームの監督はうちの監督と懇意でな。それ位なら多分許してもらえらるだろう。」

それは願ったり叶ったりだ。花凜が出られるならオレは出なくても良い可能性が高くなる。

「だが、確実じゃないからな。もし駄目だった時の為に、お前の信頼度を上げとくに越した事は無いだろ。」

「そうですね。じゃあ、行きます。」

「交代！ 代打 成沢 春樹。」

相手の投手は一年だ。

何の球種があるかも分からない。

どういう傾向の投球かも確認してない。・・・だが。

オレは右打席に入り、イチローの物真似をして構えた。

「春く〜ん、右打席なのにイチローってなんでなのさ〜」花凜が騒ぐ。うるさいな。集中させてくれ。

「アタシも出たいよ〜」結局それかよ！！大体その呼び方は梨乃の呼び方だろ。

一球目。

相手は普通に振りかぶり、投げてきた。

様子見かアウトローへの変化球だ。

バン。

「ボール。」

少し低かったな。

良いカーブだ。

二球目。

今度はインハイにストレート。

キン。

わざと掠らせてファール。

そして次。

今度は真ん中だが、球が遅い。

おそらく変化球だ。

バシ。

「ストライク！！」

予想通りカーブ。

これでツーストライクワンボール。

四球目。

アウトコースに来たストレートを、
難なく弾き返す。

センターの深いところだ。

センターに居たチャラ男は走って行ってダイビングキャッチをした
が取れず、体で止めた。

それを見て二塁を回ったが、
バシ。

三塁に球が行った。・・・良い肩してるじゃないか。
それを見て二塁に戻る。

「おいおいどうした、お前らしくも無い。いつもなら軽くサク越え
だろ。」

「平井が使えるかどうか試そうと思ひまして。」そう。平井の守備
能力を試す為にわざとセンターに打ったのだ。

「なるほどな。で、どうなんだ？」田端さんは興味津々で聞いてく
る。

「何がですか？」

「平井を使うつもりか？」

オレは人差し指を出し口元に当て、

「それは明日のお楽しみです。」と言った。

練習終了後。

「田端さん、対戦校のデータとかつてありますか？」

「ああ。もちろんあるぞ。スコアを出してやるから、ちょっと待ってろ。」

そしてたくさんスコア、そしてDVDが出てきた。

「ありがとうございます。これ、一式借りても良いですか？」

「おう、好きにしろ。」良い笑顔で言ってくる。ありがたい。

「あ、そういえばマネージャーはどこに居ますか？練習中姿が見えなかったんですけど。」

「買出しを頼んだんだ。もうそろそろ帰って来ると思うぞ。」なるほどな。それなら居ないのも納得だ。

「何だ？成沢。早速口説きに行くのか？去年よりも手が速いな。」

ニヤニヤしながら絡んでくる。

「そんな事しませんよ。それに去年も口説いたりなんかしてません。」と言ったが、

「これじゃあせっかく部員達の為にした采配が無駄になりそうだな。」嘆くようなポーズをとりながら、そんな事を言う田端さん。人の話を聞いて欲しい。

「部員の為にした采配って、何の事ですか？」

「ん？買出しを頼んだ事だが？」

・・・ああ、なるほど。

つまりは、オレから遠ざける為に。

あんなちっこい体の女子マネージャーに買出しを。

しかもかなり長い買い物だから、量もハンパではないだろう。

何か・・・自分のせいだと思つと申し訳ない気持ちになってくる。

「アイツはな〜結構人気があるんだよ。まあ、女子マネなんて大体そんなモノだけだな。」

何か言ってるが聞こえないフリをする。

いや、もしかしたらあの小さな体に凄まじいパワーを秘めているかも知れないじゃないか。

オレが気に病む必要はないさ。

「そういえば、野球用具運ぶのにも苦労してたな。あんな量頼んで大丈夫だったかな。」

「失礼します!!」言い残して走り去る。ジャージだから走りやすい。

野球用具だけで苦労するのにそんなたくさん持てるわけが無いじゃないか。

そう思っただけで走る。

「あーあ、乗せすぎたか。」頭を掻きながら困った顔をする田端。

「何してるんですか、キャプテン。」遠くに居た一年生達が尋ねてくる。

「いや、まあちよつと遊ぼうかと思っていたんだが、予想以上の反応が帰ってきたもんでな。」

「?」よく分からないという顔をする。

「と言うか、アイツ気づいてるのかな・・・」独り言のようにそう呟く田端。

「何がですか?」

「マネージャーが一人じゃ無いって事に。」

校門を出てすぐのところであのマネージャーを発見する。

「……………だが。」

「そうか、そういえばマネージャーが一人のはず無いか」口に出してやっと思い出す。

ボーっとして立っていると、向こうから気づいた。

「あ、成沢先輩、いい、どうしたんですか?」朗らかな笑顔だな。

「ねえねえ、アレ誰?」「ほら、成沢先輩だよ。SSCの。」「あ

あ、あの有名な。」

一年生と思われる他のマネージャーが声を潜めて話している。聞こえてるぞ。

「あ、その」何と言おう。まさか田端さんとの会話を教える訳にもいかないし。

この状況で手伝いに来たなんて恥ずかしくて言える訳が無い。

・・・そうだ。

「いや、ちよつと聞きたい事があつてな。」「こちら辺が妥当だろう。」「え、何ですか?」「そんな目で聞かないでくれ。というか、単純に何も思い付いてない。

オレが黙っているのをどう取ったのか、

「ほらほら、邪魔しない。」「とオレと同じ学年のマネージャーが促す。

「ごゆつくりね。」「何を言っているんだ、コイツ。さっさと行け。」「そう思っていると振り向いて、

「あ、そいつにパクツといかれないように気を付けなよ。」「そんな事を言いやがった。

全員行つてしまつて、二人きり。

「で、えとえと、その、聞きたい事つて、なんですか?」「うん。考えてないんだよな。ちよつと時間稼ぐか。

「その前に。いつから買出しに行つてた?」

「え?あの、SSCに行つて、部長に依頼を受けて貰えると伝えた直後です。」「

という事は練習は全く見てないのか。

「あの、私からもいいですか?」

「別に良いぞ。」「時間が余計に稼げる。

「その、今日はこういう練習をしたんですか?」「・・・なるほど。」「マネージャーなのだから、練習の内容が気になるんだな。

「テストが主かな。守備練習とかして、最後に紅白戦もやったよ。」「

「へ。あ、成沢先輩達も練習したんですか?」

「少しだけな。」「・・・よし。有耶無耶ちやうやうに出来そうだ。

「あ、忘れるところでした。あの、聞きたい事つて何ですか?」「忘

れてなかった！！

「え、あ、え〜っと、そうだ！その、名前！名前教えてくれるかな。
」 苦渋の策。

「え？そんな事ですか？」うわ、怪しんでるよ。だが、言ってしまったものは最後まで貫き通さないと。

「うん。最初に依頼に来た時に、聞くの忘れてただろう？折角の縁なんだから、名前ぐらい教えて欲しいな〜と思って。」

ヤバイ、絶対変に思われてる！！

居心地の悪い沈黙が続いた後、

「アハハ、そんなにかしこまって聞く事無いじゃないですか。」と笑いながら言った。

「私の名前は、岡崎 おかざき 涼子 りょうこですよ。」

・・・良かった。何とかなった。

「そうか、じゃあ岡崎。」

「涼で良いですよ。友達は皆そう呼んでいます。」うわ、あだ名とか相当恥ずかしい。

「じゃあ、オレも好きに呼んでくれ、涼。」お返しのつもりで言うてみるが、

「ありがとうございます、春先輩。」普通に返されてしまった。まあ良いか。

今日、また一人“トモダチ”が増えたのだから。

Request : 1 帰り際 part : 1

「行くぞ、涼。」オレは振り返りそう言う。
後ろから振り返ってくる制服姿の涼。

「あ、はい、春先輩。」にこやかに笑う。
ちなみに。直江学園の制服（奨励服）はセーラー服ではなくブレザーだ。

奨励服は義務ではないから特別な時以外は着る必要が無いのだが、涼は制服を着ている。

オレはジャージだ。（着替えるのが面倒だったから）

何故オレが涼と二人で下校しているかと言うと、

「おお、成沢。まだ帰ってなかったのか。他の奴らはもう先に行っただぞ。」と、田端さんが言ったからだ。

「……置いて行くなよ。」

そう思っただけを落としていたオレに、涼が

「先輩、色々と話、聞かせてくれませんか？今日の練習の事とか、気になります！！」

と言ったので、じゃあ帰りながら、と言う話になったのだ。

以上、回想終了。

「で、先輩。さっきよりも詳しく教えてください。」

「と言っても、あんまり大した事してないぞ。練習して、紅白戦して。あ、そういうば。」

「何ですか？」目をキラキラさせて聞いてくる。

「いや、テストが終わった時にな、平井が絡んできたんだよ。お前は野球出来るのか、って。それで一打席勝負って事で戦ったんだ。」

「それで、どうなったんですか？」

「一打席目はオレが勝って。でも一打席じゃ分からない、って言うたから四打席勝負になったんだけど、うちの・・・分かるかな、氷河と花凜も投げるって言うって残り三打席は一人一打席投げる事になったんだ。けど結局、四打席勝負は全部オレ達が勝ったよ。」

「え、平井君が四打席で一回も打てなかったんですか！？やっぱりSSCは凄いですね！！」興奮気味に言う。

「あ、やっぱり平井って上手いのか？」

「ええ、多分一年の中で一番上手いんじゃないでしょうか。」

「へえ、やっぱりそうなのか。」なら平井に勝ったのは効果があるだろう。

「凄いな」川柳先輩って野球も出来るのか」私とは大違いだな。」

へえ、花凜のことは知っているのか。まあ、花凜は有名だからな。

主にスポーツ方面で。

「涼は野球した事ないのか？好きなんだろ？」

「確かに好きなんですけど、私、運動神経無いから。」

「ふーん、そうなのか。あ、話飛ぶけど、家ってどっち方向？」

校門前に着いた。

我が直江学園の前は道が三つに分かれているので、家が反対方向なら分かれる事になってしまう・・・まあ今日はそんなつもりは無い。もし反対方向だったとしてもある程度までは送るつもりだ。

「こっちです。」言って指差した方向はオレと同じ方向だった。

「そうか、お前も西側なんだな。」

「？お前も、って事は先輩もですか？」

「ああ、オレもそっちだ。」

「良かった」安堵の表情を浮かべる。

「良かった、って何がだ？」

「だって逆方向だったらもうここでお別れだったじゃないですか。」

.....

・・・・・・・・・・何か、逆に新鮮だな。

氷河なんかは一応家が東側だから、（オレがイヤだといつても強引に）よく荷物を取りに付いて行かされるんだが。

まあ、これが本当は普通なんだろう。

「別に反対側でも今日はちゃんと送るつもりだったさ。涼がもう良いつて言うまでだけど。」

「あ、そうなんですか。でも嬉しいなあ。」

本当に嬉しそうだ。だけど、そんなに嬉しいものか？まあ、なんとなくは分かるが、遠くてもあんまり問題は無いと思うんだが。

「あ、そういえば聞きたい事があつたんですけど、良いですか？」

「どうした？答えられる範囲なら答えるぞ。」内容にもよるけど。

「その、去年の野球部を助っ人した時の話を教えてください。」

「え？それが聞きたいのか？」なんか予想と違ったが、まあ良い。

「はい、良ければ是非、教えてください！！」

・・

・・・・・・・・まあ、良いか。

実は、ほとんど覚えてないんだけど。

「あれはな・・・・・・・・」

R e q u e s t : 1 帰 り 際 p a r t : 2 (前 書 き)

どうも、三週間ぶりです。

色々あって更新出来ませんでした。ようやく更新再開です。

更新してなかった間いつも見に来てくださった方々、ありがとうございます。

これからは以前よりも頑張りたいと思います。

Request : 1 帰り際 part : 2

「あれは、去年の9月くらいだったな。その頃にSSCを結成したんだけど、最初は全然人が来なかったんだ。それでどうやったら依頼する人が来るかを考えたら、とりあえず実績を作ろうって事になった。それでメジャーな野球部に無理矢理依頼をねじ込んだんだ。」

涼は黙って聞いている。・・・出来れば相槌くらいは欲しいが、まあ良い。

「後は今回と同じ。今回と違うのは、去年の依頼はもっと時間があつたってことだな。」

「どれくらい時間があつたんですか？」

「確か三週間くらいだったかな。だからしっかりと準備も出来た。」
「今では準備期間三週間なんて考えられない。割と頻繁に依頼が入ってくるので、一つの依頼に三週間もかけたら依頼が全てはこなせなくなってしまうのだ。・・・まあ、今回のように本番まで二日と言うのも珍しいが。」

「その間何かトラブルとか無かったんですか？」

「ん、それ聞くか？あんまり面白い話じゃないんだけど。」

「それでも良いです！」

「えーっと、基本的には今回の平井の事と同じだよ。オレ達は野球出来るのか、って。それで戦うことになったんだ。」

「それは誰が言ったんですか？私の知らない人ですか？」

「田端さんだよ。今でこそ友好的だけど、最初は目の敵にされてたんだぞ。・・・っと。」

自販機が見える。・・・そういえば喉乾いたな。

「なあ涼、喉乾いてないか？」

「え？えーっと、少し。」急に話題が変わって驚いたのか一瞬怪訝な顔をして答える。

「そうか、じゃあ何飲みたい？」財布を取り出しながら自販機の前で立ち止まる。

「あ、イヤ、悪いですよ、そんな。」…………別に遠慮すること無いのに。

「良いんだよ、遠慮しなくても。」

「イヤ、でも……」

財布をカバンから取り出そうとしているのを手で制して、

「友達とは言え下級生なんだから、奢られても良いじゃないか。取りあえず奢られとけよ、後で金取ったりしないから。で、何が良い？」と聞いた。

涼はしばらく躊躇^{ためら}っていたが、やがて観念したようにこう言った。

「じゃあ、ミルクティーでお願いします……。」

オレ達はミルクティーを飲みながら歩いている。

「……というわけでその時の依頼をこなして、少しずつ依頼が増えて今の状態になったんだ。」

「へーそうなんですか。あのキャプテンが最初は友好的じゃなかったなんて……全く想像がつかないです。あんなに朗らかで優しいのに。」

「まあ、普通の人はそういう反応するだろ。だって急に出てきて助っ人するなんて言っても、得体の知れない奴に任せたくないだろ。」

オレも逆の立場なら無視するさ。」

「そんな物ですかね……。」

他愛も無い会話を続けていると、商店街が見えてきた。

オレの家は商店街の少し向こうなのでもうすぐ家に着く。

「涼の家ってどこら辺にあるんだ？ここから遠いのか？」

「商店街を抜けて右に曲がったすぐのところですよ。」

「え？それじゃオレの家の近くじゃないか。」

「そうなんですか？でも、あの辺り私の住んでるところ以外アパー

ト無いんですけど・・・ハル先輩って確か一人暮らしでしたよね？・・・もしかして同じアパートとかですか！！」

「イヤ、同じアパートは絶対に無い。・・・っていうか何でオレが一人暮らしだって知ってるんだ？言ってるんじゃないよな？」

「だってSSCメンバーは良く噂されてますからね。誰がどういう状況かなんてある程度はすぐにわかっちゃいますよ。」

「なんだって？そんな理不尽な状況にオレは置かれていたのか・・・何てことだ、オレのプライベートが・・・。」

「まあまあ、気を落とさずに。それに、全部完璧に分かってるって訳でも、全部本当だって訳でも無いですよ。だって、噂だと春先輩、昔不良グループを一人で潰した、って事になってるんですよ？だから、今日SSCに依頼に行くの怖かったんですから。まあ、実際に会ったら全然怖い人じゃなくて良かったですけど。」

「・・・。」

「？どうしたんですか？春先輩？」

「・・・その噂、多分実話です。」

「い、いやあ、何でも無いぞ、アハハハハ。」乾いた笑みで返す。

「何か冷や汗かいてませんか？」

「い、いやあ、気のせいだよ、アハハハハ。」ツ、ツライ。

「その割には、さつきから妙に片言ですけど。」

「い、いやあ、そんなことは無いぞ、アハハハハ。」純粋な目が今のオレにはツラすぎる！！

「？なら良いんですけど。」た、助かった・・・。

まあ、ただ結果がそうだったというだけで。実際は空手の試合に勝ったらそいつがボスで、オレに次のボスを継がせるから好きにしろって言われたから解散させただけ・・・なんか今思い出すとマンガみたいな話だな。

「それで、何で絶対に違うんですか？」

「え、何が。」

「だから、アパートがですよ。だって、一人暮らしならアパートか

マンションですよ。だけど、私の住んでるところ以外はアパートもマンションも近くにないですよ。」

「まあ、その理由は家に着いたら分かるさ。近くなんだし見ていくだろ？」

「はい、見たいです。という事で、急ぎましょう!!」

オレ達は商店街を駆け抜けた。

R e q u e s t : 1 帰り際 p a r t : 3 (前書き)

久しぶりの投稿です。

お待たせさせてしまっている方々には大変申し訳なく思っています。

では、どうぞお楽しみください・・・

Request : 1 帰り際 part : 3

「え、なんですか、これ。」涼は目を白黒させている。

「何って、オレの家だけど？」本当は笑ってやりたいところだが、
敢えて平静を装って言い返す。

「・・・だってこれ、本当の“家”じゃないですか！！」・・・
そうなのだ。

オレの住んでいる場所が涼と同じアパートでは無い理由は、一つ。

「・・・オレの住んでいるのは“家”なのだ。」

しかも、普通の家ではなくこれは最早豪邸（モトヤ）と呼んでも良いだろう。

塀と柵に囲まれそびえ立つ三階建ての建物は、来訪者に対して威圧
感を持っているようにも見える。

「・・・そりゃ、初めて見たら驚くよなあ。」

これまでに来た奴も初めて見た時は驚いていたからな。

「しかも、ここって近所でも有名なお金持ちが住んでるって噂の屋
敷ですよ？」・・・そんな噂があったのか。

「ま、そんな細かい事は気にせず。さっさと入ろうぜ。」

玄関を開ける、と同時に

「あ、お帰りなさい。」そんな声が聞こえてきたので、言葉を返
そうとすると、

「・・・ナンデスカコレハ？」

何故か玄関にはエプロンを着た梨乃と花凜。
しかも、

・・・あれ？まさかのエプロンオンリー？

「オジヤマシマシター」そう言っただけで固まっている涼の手を引いて出て行くとする。

うん、これはきつと悪い夢だな。

何かして時間を潰そう。

ガシッ。・・・掴まれた。

「あれ？春ぼん？せっかく女の子二人が水着にエプロンでお出迎えしてるのに反応が無いぞ？」

あ、良かった、水着も着てるか。・・・あれ？皆なんだい？その目は。まさかオレがっかりしてるとでも？

・・・や、やだなあそんな訳無いじゃないか。

え？あれ？な、なにその人を蔑む様な目は？だ、だからがっかりなんかにしてn a (r y

「いきなりすぎだろ！！大体迎えるのにそんな格好をする必要は無い！！」

「ちよ、ちよつと凜ちゃん、言っただけで反応と違うよ？やっぱり喜ばないじゃない！」

「いや、これはきつと照れ隠しだよ？本当は飛び上がりたいくらい嬉しいんじゃないかな。」

「そ、そんな訳ないだろ。と、とにかく服を着ろよ。」

「ほら、普段は滑舌が良いのにメチャクチャ詰まってるじゃん。」

・・・う、確かに目のやり場には困るけどさ。

「ほ、ほら、後輩も居るんだからそんな格好でうるちよろするなつて。」

涼を盾に使う事を思いついた。よし、冴えてるぞ、オレ。

「あれ？いたの？え？つと、岡崎さん、だよな？」

今気付いたかのように言う梨乃。・・・おそらくこの二人は本

気で気付いていなかったに違いない。

「あ、はい。おじゃまします。」金縛りが解け、二人に挨拶する涼。手で示して二人を着替えに行かせる。・・・よし、これでもう大丈夫だな。

「あ、あの、春先輩？何でここに川柳先輩と立川先輩が？」涼が急に聞いてきた。

「え？ここに住んでるからだけど？」

「え、い、今、なんて言いました？」・・・？何を慌ててるんだ、涼は。

「だから、俺達はここに住んでるんだけど？」

「へ？え、あの、その・・・」

何故か黙ってしまった。・・・おかしいな？そんなに変な事言ったか？

というよりも、情報が出回ってるなら俺達と一緒に住んでる事ぐらゐすぐに分かるんじゃないか？

・・・あれ？すごい顔真っ赤にして俯いてるぞ？

黙ってしまって、居心地が悪い空気になってしまった。

「おい、成沢。早く上がって来い。する事なんていくらでもあるんだぞ。」部屋から出てきた氷河が言ってくる。

「え？・・・なんで、淡雪先輩も居るんですか？」不思議そうな表情で聞く。

「や、さっきから言ってるだろ？ここに住んでるんだって。」

「・・・え、だってここは三人の愛の巣だって言ってたじゃないですか！」

「そんな事一言も言っていないぞ！！『俺達は』って言ったじゃないか。」どんな勘違いだよ！！

「えゝっと、すると、どういう事になるんですか？」

「つまり、この家はSSCメンバーが住んでるんだよ。」まあ、正確には少し違うのだが、大体合ってるからいいか。
今日一番の驚きを見せる、涼の顔が印象に残った。

Request:1 成沢家?の食卓・・・?(前書き)

またしばらく更新が止まっていました
本当にすいません
これから頑張ります

・・・最近これがセットになった気がします

Request : 1 成沢家?の食卓・・・?

「醤油取ってくれ、梨乃。」

「はい。お醤油だよ、ハル君。」

「サンキュ。」

フライパンに醤油を入れていく。

特売で買った無駄にでかい業務用のモノだから、分量を間違えないように気を付ける。

ジューッ。

良い音を立てて肉が焼けていく。

「あのー、何をしてるんですか?」涼が不思議そうに聞いてくる。

「何って、しょうが焼きだけど?」

「あ、そうですか、美味しそうですね・・・ってそうじゃなくて、なんで料理してるんですか?」

「いや、腹減ったしもうすぐメシの時間だしな。」

「そうですか・・・」

ん?何で俯いてるんだ?良く分からん。

「じゃあ、私はそろそろ帰りますね。」

「え?何でだよ、食ってかないのか?」

「え?え?ど、どういうことですか?もうご飯にするんですよね?だったら、私が居たら邪魔じゃないですか。」

「そんな事ないよ」。私達は涼子ちゃんと一緒に食べたいよ?。」

うわ、出たキラキラ光線。この目で頼むのは反則だよ。

というか。今気付いたけど梨乃と涼って似てないか?・・・イヤ、特にどこが、って訳じゃないけど、なんか雰囲気とか。

まあ、そんな事は置いといて。

「そうだぞ、邪魔なんてありえないだろ。涼も一緒に食おうぜ。それに、大勢の方が美味いって言うだろ。」

「春先輩達がそう言って下さるなら、遠慮なく。」と、言葉とは裏

腹に遠慮がちにそう言った。

「あれ、あれ？何だろうね？」

「何がだよ、花凜。」急に出てきて、面倒くさい奴だ。

「イヤ？なんで二人がそんなに仲良くなつたのかな？って思つてさ。」ニヤニヤ・・・否、ニヨニヨした表情で言う花凜。

「は？何言つてるんだ、お前は。本格的に頭がおかしくなつたか？どうしてそう思ふんだよ。」

「だってさ、な～んか知らないうちに『春先輩』、『涼』って呼び合つてるじゃんかよ。」

「は？それが何だよ、別に普通だろ、それぐらい。」・・・オレも本心ではあんまり普通じゃないと思つてるけど、それは敢えて棚上げだ。

「そうかな？そうだったかな？で、そのところどうなの、涼ちゃん。」

「うわ～メチャクチャニヤニヤしてやがる・・・。」

「へ？あ、イヤ、あの、その・・・。」

「ちょ、ちょっと止めてあげようよ、リンちゃん。」梨乃が止めに入る。

「もう、かつたい（固い）なー、梨乃ちゃんは。別に良いじゃんこれくらい。・・・で、どういうことなのかな？」

「別に大した事じゃないさ、友達なんだから堅苦しく呼ばなくても良いって言っただけだよ。」

オロオロしている梨乃の代わりに答える。

楽しそうにしている花凜には悪いが友達である下級生の女子がいじられてるのを黙って見過ごすわけにはいかない。

「・・・・・・・・・・まあ、正直なところ。このままどんテンションが上がってしまい、こちら側にも被害が拡大するのを防ぐためという理由もあるにはあるが。」

「そんな事が通用するとも思っているのかい？『春先輩』。」

「通用するも何も、それが真実なんだからしょうがないだろ。それ

以上の理由は無いら、それ以外の事情も無い。これが全ての真実だよ。」

「ふん、そうなのか。へ、そうなんだな。」つまらなそう・否、むしろ感情がこもっていない棒読みでそんな事を言う。言いやがる。

・こいつのこの反応は、全然信じてないな。まあ、どうでもいいけど。

「あ、そうだ。私達もハル君みたいに名前と呼んで良いかな？」にこやかに笑いかけながら言う梨乃。

「え、あ、どうぞ。名前でも何でも、好きなように呼んで下さい。」

「ありがとう。じゃあ、これからよろしくね。リョウちゃん。」目を合わせてから、涼がこちらこそよろしくと言う。・そしてすぐに花凛も、

「アタシもよろしくね、涼たん。」

「りよ、涼たん、ですか・・？」何でも好きなように呼べと言ったものの、さすがにこれは予想外だったのだろう。

というか、涼たんって。どこの萌えキャラだよ。

「ん？駄目かな？じゃあ別の呼び方でも良いよ？」

「あ、イヤ、別にその呼び方で良いですよ。」

「それと、アタシ達の事も名前と呼んで欲しいかな。『春先輩』みたいなさ。」

「あ、分かりました。じゃあ・・・『凛先輩』『梨乃先輩』って呼びますね。」

こうして。

オレ達SSCメンバーと涼は

「オイ、誰がSSCメンバーだ？僕と西園寺がいないのにそんな事を言うのは感心しないな。」

部屋に入ってきていきなり遮られた。

・・・頼むからモノローグに突っ込みを入れないでくれ、氷河。後、多分気のせいだけどなんか久しぶりだな・・・そして相変わら

ずのクールっぷりだ。

「良いじゃないかそんな些細なこと。大体健太は家の中にすら居ないじゃないか。ただでさえ出番が少ないのに、こんなことじゃ皆に忘れ去られるぞ。」これはお前にも当てはまる事だけど。

「アイツは今ロードワーク中だよ。・・・そんな事より、」

健太のことはそんな事呼ばわりか。

「早く食事を取って上がって来い。DVDの確認するんだろ。」

「ああ、そうだったな。よし、メシを・・・」

「そういえば、さつきから少しだけ焦げ臭いんだが、これはどういう事だ？」

全員がフライパンを見た。

「・・・そこには、黒く焦げた何かが入っていた。」

Request:1 SSCの食卓

「悪いな、こんなメシで。」苦笑しつつそう言う。

「いえ、お邪魔してるのにわがままは言えませんよ。」

「・・・本当にゴメンね。リヨウちゃん。私がちゃんと見てれば・・・」

「イヤイヤ、悪くないよ梨乃リン。皆が話に夢中で気付かなかったんだから。」

花凜がまともなフォローをしている・・・珍しい。

結局。

しょうが焼きは黒コゲで食べられそうに無かったので他の物を作ったのだが、元々二日分の食料はしょうが焼きで何とかする予定だったので冷蔵庫にほとんど物が無かったのだ。

在ったのは朝食に使えるそうな、食パン、卵、ウインナー、ベーコン、トマト、キュウリ、その他の野菜だけだった。

なので今テーブルに並べられているのは、目玉焼き、玉子焼き、オムレツ、と玉子だらけだ。

「ちよつと、ハル君。他にもウインナーとかもあるでしょ。」

「・・・そういえば、お前はオレの心が読めるとかいうチート設定だったな、忘れてたよ。」

つと、今の突っ込みに涼が首を傾げているぞ。

「梨乃、涼が不思議がるから変な事言うなよ。」

「だ、だってハル君がちゃんと全部言わないんだもん。そんな言い方じゃ『何でベーコンとかもあるのにそんなに偏ってるの?』って皆が思うじゃない。」

「良いだろ、別に。というか、それを狙ってたのにぶち壊さないでくれよ。」

「え?そうだったの?あの、ゴメンね。」

くそ、この小説史上初の叙述トリックじゆつぷくを使おうと思つていたのに・
・・・え？何？これは叙述トリックって言わない？

・・・まあ、またの機会にしよう。

「イヤ、別に良いけど・・・そういえば、さつさと食わないといけないな。」

「そうだよ、ハル君。ヒヨウ君が待つてゐるんだから速くしよ？」

オレは黙つてメシを食べる。気分的にはフードファイターだ。

・

・

・

「あゝ、やつと食い終わった」

「ほらほら、速く行きなよっ！氷んが待つてゐるよっ！！」相変わらずの歯切れのよさでそう言う花凜。

「氷ん！？それ何つて読むんだよ！！」初めて見たぞ。

「『こおりん』だよ、ほら早く行かないと。」

分かつてるよ、と言つて二階に上がる・・・・・そういえば、何か重大な見落としをs

「涼さんの事は任せてね！たっぷり可愛がつとくから。」

・

涼と花凜を二人にさせたら

梨乃もいるな

大丈夫な

のか？

・

涼も何かあの二人から学べる事もあるだろう・・・花凜、お手柔ら

かに頼む。

そして梨乃。

お前はどうかして涼を魔の手から・・・無理だな、うん。

まあ、ほどほどに頑張ってくれ。

「ニッヒツヒ、じゃあそろそろ始めましょうか。」

食器を片付け終わって、花凜が一言。

「え？何を始めるの？」

「そりゃ、ねえ……。涼たんの事を知るための楽しい楽しいお話だよ。」

ニヤニヤしながら、手をワキワキさせながら言う花凜。

「え、あ、へ？わ、私……。ですか？」

「そ・う・だ・よ。という訳で、第一回涼たんの……。何してんの、梨乃。」変な愛称をつける事を忘れるほどに疑問に満ち溢れながら尋ねる花凜。

「え？何って、リヨウちゃんを魔の手から守ってるんだよ？」

「……。何でそんな事してるのさ？」

「だって、ハル君に頼まれたんだもん！！」

「え？何を言ってるの？梨乃たん？」

「だから、リヨウちゃんを守ってくれて頼まれたんだよ」

「……。梨乃ぼん、きつとそれは気のせいかな、耳の錯覚だよ？だ・か・ら、そんなの気にせずに行こうよ。」

「え？？そんな事無いと思うけど……。でもまあ、良いかな。分かったよ、リンちゃん、気にしないようにするよ。」

「そうだよそうだよ、それが良いよ。……。それでは第一回涼たんの事をもっとよく知ろう大会！！」

「え、あ、あの、それは一体何をするんですか？」戸惑いながら聞く。

「ん？ひたすら喋るだけだけど？。それでは始めましょう。いきなり質問タイムッ！！」

「じゃあ、まずは私からね。リヨウちゃん、何年何組？」

「えーっと、本校の1年B組です。」

「身長を教えて、涼たん。」

「た、たしか155cmだったと思います。」

「好きな食べ物は何なのかな？」

「え、あ、うーんと、プリンですかね。」

「体重何キロある？涼たん、軽そうだけど。」

「え、えーっと「見ないでー！！」ですね。」

「どこに住んでるの？」

「そのアパートです。」

「涼たん、胸大きいねー！！何カップ？」

「え？そ、それは・・・」「残念ながらこの部分はお見せできません」
「くらいですけど・・・あの、何で凜先輩は身体的な事ばかり質問するんですか？」

「え？まあ、良いじゃん、良いじゃん。さて、ではその大きな胸を」
ドダダダダッ！！！！

階段を駆け下りてくる音が聞こえる。

「な、何か今オレの後輩の身に何か危険が差し迫った気がしたんだが、何かあったか？」

「へ？何の事だい？春樹くん！！何も無かったよー！？」「くん」
を強調する花凜。

「お前がその呼び方をするという事は絶対何かあったんだな。よく分かるぞ。」

「そんな事無いよ！！ねー涼子ちゃん！！！」必死に語りかける花凜。

「え、あの、はい。何も無かったですよ、春先輩。」

「うーん、そうか？まあ、涼がそう言うなら別に良いんだけど・・・」

「春先輩、わざわざ私のために降りて来て下さってありがとうございます。」
「います。大丈夫ですから、試合のデータの確認を続けて下さい。」

「あ、ああ。じゃあ、戻るけど、何かあったらすぐに呼ぶんだぞ？」

「はい、分かりました。」

トントントン、と階段が上がっていった。

「ふゝ、危なかったゝ春ちゃんのああいう時は怖いからね」

「そうだねゝ、あの状態になったら説教長いもんねゝ」

「ところで、涼たん。春ちゃんの事どう思ってる？」いきなり質問を繰り出す花凜。

「え？あ、その、凄いなゝとか、噂と違って優しいなゝとか、ですかね。」

「ふゝん。じゃあ、もし春ちゃんが喜ぶ事があるって言ったら、それやってみる？」

「え、何ですか？それ、是非教えてください！！」

「そうだね、じゃあ……」

Request:1 SSCの食卓(後書き)

感想を・・・下さい・・・

い 誤字・脱字・読めない漢字・矛盾点などありましたら教えてくださ

R e q u e s t : 1 データ入力・・・（前書き）

何か本当に久しぶりのような気がします

10月の忙しさは異常だな、うん

ではSSC、お楽しみ下さい・・・

Request : 1 データ入力・

背中に悪寒が走った。

「……………」

「どうしたんだ、成沢。休んでないで打ち込め」

「ああ、悪いな氷河。何か良く分からないけど嫌な予感がしてな」

「……………そうか、それはご愁傷様だ」残念そうな顔で静かに目を瞑る氷河。

「何がご愁傷様なんだよ、ただ予感がしただけだぞ」

「経験上お前の予感の良さは良く当たるからな。どうせ何か余計な事をしている奴がいるんだろう」

「……………おそらくだがそれは確実に花凜だろう。」

「ま、さつさと作業を終わらせようぜ」

「中断していたのはお前のせいだろうが……………」

今まで。

オレ達はスコア・DVDの確認作業をしていた。

とは言っても、ほとんどはオレが来るまでに氷河によって確認済みだ。

したがって、今現在オレ達がしているのはデータの確認ではない。

「あゝ、手と目が疲れる。久しぶりだと結構キツイんだな」

「つべこべ言う暇があったらさつさと打ち込め。人数が多いから一人だと大変なんだ」

「……………オレ達はデータの打ち込みをしている。」

スコアとDVD、今日のテストの結果のデータを打ち込んで試合のシミュレーションを行うためだ。

「あゝもうちょっとで終わるゝ」

「まだ終わってないだろ、手を緩めるんじゃない」

「はいはい。んじゃ、さつさと終わらせちまおうか」

黙って打ち込む。

打ち込む。

打つ。

打鍵する。

Hitする。

.....

.....

.....

「お、終わった・・・」

「何を言ってるんだ、これからが本番だろう」氷河は言う。

そう。

データの入力をして終わり、では無い。

むしろここからが重要だ。

試合のシミュレーション。

相手校の戦力と、ウチの戦力。

それらのデータを解読、解析し試合のシミュレーションを行う。

しかし。

「でもさ、別に張り付いて見てる必要無くな？最後に結果だけ確認すればさ」

「何を考えているんだ、成沢。何のためにパワプロ方式に見やすくしたと思ってるんだ」

「いや知らねえよ！別に頼んだ覚えないし、オレは他にもやる事あるだよ！！」

「それは一体何だ？どうせ下に降りて岡崎達の相手をするぐらいだろう？」

「・・・クツ、凶星だ・・・」

「悪い事は言わないから、止めておけ。・・・少なくとも今はな」

なんだ？少なくとも今は？え、今降りたら何か駄目な事があるのか？

「イヤイヤ、そんな事ねーだろ・・・でも、氷河の顔は真剣そのものだし・・・」

「黙るなよ、成沢。とにかく今は試合の確認だ」

「ヘイヘイ」

「ま、深く考えるのは止めましょう。」

「えーっと、これで・・・何対何だったっけ？」

「これで67勝43敗だな」

「あゝ、そうだったな。・・・この結果なら普通に勝てるんじゃないか？」

「そんなわけがあるか、成沢。何処に目をつけているんだ」

「え、いやだって、この結果なら約7割の勝率じゃないか」

「良ゝく考えろ、成沢。このデータには重要な欠陥がある」

「ああ、それはあれだろ？相手のチームは一年生のデータが無いって事だろ？」

「今年度になってからまだあまり経っていないから、対戦もしてなくてデータが無い。」

「でもそれは、あんまり重要じゃないだろ？即戦力が入ってなかったら影響が出ないじゃないか」

「お前はバカか。それもデータの欠落だが、それよりも重要な要素があるだろ」

「・・・分かん。全然分かん」

「少しは考えようとしろ。・・・まあいい、教えてやろう。それはな、ウチの野球部のエースがデータに入ってることだ」

「・・・ああ、なるほど。」

試合に出れない奴がデータに入ってる、と言う事は　しかもそれがエースならば　大きくデータが狂ってしまうだろう。

「なんでわざわざデータ入れたんだよ」面倒くさくなるじゃねーか。
「入れたんじゃない。入ってたんだ」

「は？何だよそれ。何で入ってるなんて事があるんだよ」

「良いか、僕達は以前にも依頼を受けただろう？その時も同じようにしたじゃないか」

「イヤ、知らねえよ？その時お前のPCはこの家に無かったじゃないか」

「・・・そういえば、そんな気もするな」

「そんな気もするな、じゃねえよ！ちゃんと説明しとけ」

「説明・・・ねえ。してもあまり意味が無いと思うがな」
ぐ、確かに。

「・・・はあ、まあ良いや。で、どうするんだよ」

「（・・・そろそろ頃合か）おい成沢、ここはもう良いから下に降りろ」

「は？何でだよ、まだ作業は終わってないじゃないか」

「良いから降りろ。・・・おっと、下に降りたら準備しとけよ。それと、ホラ」

紙の束を差し出してきた。

「準備は分かったけど、この紙は何だ？」

「は、中身を見たらすぐに分かるだろうが。せめて見る仕草をしてから言えよ。・・・それは一人一人のデータと試合のスタメン案だ」

中をパラパラ捲ると、確かにそんな感じだった。

「分かった、確認しとく・・・よ？」

あれ？良く考えたらいつこれを作ったんだ？

・・・おかしくね？

オレが来てからそんな作業はしていない、
という事は。

「おい氷河、お前いつこれを作った？」

「お前が来る前だが？・・・ああ、言っておくがお前の作業は無駄
じゃないぞ」

え？そうなのか？

「当たり前だ。やはりシミュレーションをするのとしなのでは大
きく違う」

・・・まあ、そういう事なら仕方ない・・・のか？

「成沢、そんな事はどうでも良い。素早く降りろ」

「はいはい、分かってますよ」

そう言ってから。

部屋を出て、階段を駆け降りた。

Request:1 データ入力・・・(後書き)

ある作品を読んでいたらですね、後書きのページで感想書いてくれた人に感謝を述べていたんですよ

・・・でね、真似しようかと思いましたが

これからは感想に対して反応したいと思います

・・・と言うわけで、一ヶ月前ですけど

タムらんさん感想ありがとうございます！

感想があるとやる気が出ますね、これからもよろしくお願いします

か、感想をくれ〜！！

以上、後書きでした

R e q u e s t : 1 一階の惨状（前書き）

どうも、お久しぶりです

・・・また一週間空いてしまった・・・

いや、僕も頑張っではいるんですよ？

でもね、いかんせんタイピングが・・・（泣）

さて、前フリはこれぐらいにしといて、本編どうぞ

Request:1 一階の惨状

氷河・・・

お前、分かってたな・・・

一階がこんな有様になっている事に・・・

「何だ、これは？」

そこには衣類 正確にはナース服やメイド服など
していた。

が散乱

「全く、何やってんだあいつらは」

溜息を吐きながら拾っていく。

何やってるんだ、とは言ったがおおよそ予想はつく。

おそらく・・・

「（ほれほれ、涼たん。春樹っちが来たよ？早く出な）」
ん？何か隣の部屋から声が聞こえるが・・・どうしよう？

A・扉を開ける

B・そつと中の様子を伺う

C・むしろ大声で呼びかけてみる

何だよ、この選択肢！！

ろくなのが無いじゃないか！！！！

というか、これ結果的にはほとんど同じじゃねーか！！

最早選択肢の意味を成してねーよ、これ！！

自問自答していると、後ろで扉が開いた。

「あの～春先輩？どうして頭を抱えているんですか？」

「ああ、イヤ別に大した事じゃない」と言って振り返ると、ナンデ
スカコレハ？

おっと、二時間ほど前の事を思い出ししまった。
デジャブってヤツだな。

でもさ？今回はちょっと破壊力が違うよ？

「…………涼？何でそんな格好をしているのでございましょうか？」

焦りすぎて口調が変になっちまったじゃねーか。

まあ、それもそのはず。

梨乃や花凜は良く見慣れてるけど、涼がそういう格好をするなんて想像もしてなかったんだからな。

しかも……

「何で、何でブルマなんだ~~~~~!!!!!!」

マニアック過ぎるだろうが!!

「それはもう、春ちゃんの好みに合わせたんだよっ！」部屋から出てきて言う花凜。やっぱりコイツの仕業か。

「合わせる必要は無い！というか皆無だ!!」

「好みなのは否定しないんだね」梨乃、そこで出てこないで。有^う耶無^や耶にしようと思ってたのに。

それに、某怪異が登場する小説およびアニメと同じくだりだよ、これ。

……………うん、化語ですね。

「とりあえず涼。何か上に羽織ったらどうだ？」出来る限り心を落ち着かせ、冷静に言う。

「あれあれ？どうしたのかな？可愛い可愛い後輩が、春^{はる}つちのためにこんな格好してくれてるのに感想は無いのかな？」…………

オレのために、を強調しすぎだろ。

「ど、どうでも良いだろそんな事。ほら、さっさとこれ着ろ」といつてそこら辺に落ちていたパーカーを差し出す。

……………が、

アレ？何か俯^{うつむ}いてるよ？オ、オレ何かしたか？

と思った矢先、突然顔を上げ、

「ジーツ」

うつ。か弱い小動物の様な目でこっちを見てくる……………。

「ジーンッ」

「……耐えろ、耐えるんだオレ。」

「ジーンッ」

「……もうムリ。」

これはもう言うしか無いのか？

でも、何て言うんだ？『似合ってるよ』か？それとも『可愛いよ』
ぐらいは言った方が良いのか？

「……クソ、オレの経験値が足りないからベストなチョイスが分からない！！」

迷った末に、オレの選んだ答えは……

「えーっと、その、あの……も、萌えるよ」

って何でだ~~~~！！！！！！

いくら何でもそのチョイスは無いだろ！！

よりもよってなんでそれを選んじまうんだよ、オレの脳細胞！！！！

しかも萌えるって！！今日出来たばかりの友達になんて事言ってるだ、オレ！！！！

これでオレの評価ガタ落ちになるじゃねーか、チクショー！！！！と、思ったけど。

「……何か、頬を赤らめてますけど？」

もしかして、これが正解だったのか？

そう考えていると、オレの手からパーカーを受け取ってにこやかに笑い、そして。

「ありがとうございます、春先輩」良い笑顔で言い切った。

ver. 3

↓降りてくるまでに起こった事ダイジェスト

「これで春樹っちは喜ぶよっ」

「こ、これですか？」花凜が持ってきたのは色々な衣装。

「うわゝ相変わらずたくさん有るねゝ。いつも思っただけでどうしてこっこの持つてるの？」

「ま、そんなことは気にしないの。ほら涼々、好きな選^{しん}びなよ」

「そ、そんなすぐには決められませんよ」その言葉に花凜はニヤリと笑って、

「だったらさゝ、とりあえず片っ端から着てみよう？」

「え、えゝゝ！！」・・・その叫び声は二階には届かなかった。

「これも似合うけどなゝダメかなっ？」

「駄目というか、その。は、恥ずかしいです」

それもそうだ。

今花凜が示しているのは露出部分が圧倒的に多く、最早服というよりも下着に近い代物なのだ。

「そっかゝ、残念」さほど残念そうでも無く、服をしまつ。まあ、

一回着せたから満足したのだろう。

「あ、そうだ涼たん。一つ言っておく事があつたよ」急に何かを思出す花凜。

「え、な、何ですか？」

「あのね、春君はプライド高いから、自分が気に入った事もあまり褒めないのさ。だから、多分最初は適当に誤魔化すと思っただけど、そこで諦めちゃダメだねっ」

「ぐ、具体的にはどうすれば良いんですか？」

「そうだねゝ、潤んだ瞳で見上げて、春樹っちが何か言っまで待つてるのが良いんじゃないかなっ」

「う、潤んだ瞳、ですか・・・？」少し躊躇しながらも尋ねる涼。

「そうそう、そうしてればきつと何か言ってくれるさっ。でもね、そこでも誤魔化す可能性はあるんだよねゝ。だから、ちゃんと言っ

てくれるまで続けるんだよ？」

「は、はい。分かりました凛先輩」

「（まあ、たぶん春つちの事だからすぐに言うだろうけど）」これは今までツルんできた経験から来る直感だ。

「え？何か言いましたか？」

「え、ああ。あのね、春たんが言った言葉で、どれだけツボにはまっただかが分かるよ」

「そうだね、多分ハル君なら『可愛いよ』ぐらいは言ってくれるんじゃないかな？」着終わった物を片付けていた梨乃が会話に参加してきた。

「梨乃りん？それ、間違っではないけどアタシの予想とはちょっと違うね」

「え？？じゃあ、どう言うの？」

「そうだね、普通に似合ってるなら『似合ってるよ』、想像以上に似合ってるなら『可愛いよ』、春樹つちの中で最高クラスなら『萌えるよ』かなっ」

「なるほど参考になるよ、リンちゃん」

「涼たんも分かった？・・・ってあれ？」

「・・・はっ。少し意識が飛んでました」

「え、って事は今の話聞いてない？」

「あ、いえ。何故だか話の内容は覚えてます」

「そうかつ、じゃあ、安心だねっ」

その後も衣装の取替えは続いた・・・

～ダイジェスト終了～

「よし、準備完了っ」と

あの後。

部屋の片付けをして、試合のスタメン案に目を通した。

その後で準備に取り掛かり、今準備完了した。

「あの、春先輩。これ何ですか？」

「ん？分からないか？バットとグローブだけだ」

「・・・何でそんな物を用意してるんですか？」

「え？うーん、そうだ！涼、お前今日時間あるか？」

「え、あ、はい。今日は特に予定は無かったですよ」

「じゃあさ、これからオレ達が行くところについて来るか？」それが一番手っ取り早い。

「え？別に良いですけど、どこに行くんですか？」

「球場だよ、野球するんだから当然だろ？」

「え、それってd」ガララーツ。

どうやら懐かしいヤツが登場のようだな。

「ん？どうした春樹。生霊を見たかのような表情をして」

「・・・イヤ、夕方も会った筈なのにかなり懐かしく感じたただけだ」不思議な事もあるもんだね。

「そうか、おっとそれよりももうそろそろ時間だろう？出発しなくてもいいのか」

「あ、もう出るけど。氷河を呼んでこな「もう居る」・・・早いな」

突然出てくるな、氷河。ビックリするだろうが。

「さて、涼も行くよな？」

「え、はい、モチロン」何か聞いたそうだったが、それ以上何も言わなかった。

「よし、全員居るし行くぞ」

そう言っただけ等は家を飛び出した。

Request:1 一階の惨状(後書き)

どうやら今僕は滅多に無い忙しさの真っ只中にいるようです
水曜から金曜にかけても用事があるし、来週も行事が・・・

だからそれが終わるまでは更新遅くてもご勘弁を！！

最低来週の木曜日まで更新出来ないかも知れませんが、どうか暖かい目で見守ってください・・・

本当に、本当に来週からは頑張るから！！

嘘じゃないから！！

・・・・初期の更新速度に戻りたい

戻れるように努力はしてます

ではまたノシ

R e q u e s t : 1 田端の策略（前書き）

今回は田端さん視点からのスタートです
ではどうぞ・・・

Request : 1 田端の策略

〔田端side〕

成沢が帰った後、部室で着替えていた。

「キャプテン、これからお好み焼きとかどうですか？」残っていた数人が声をかけてきた。

「……少し考えて、ある考えが脳をよぎりそれを断る。」

「そうですね、じゃあ俺らだけでいきます」と言っつてゾロゾロと歩いて言った。

それを見送った後、俺はグラウンドの横へと向かった。

「やっぱりここに居たか、平井」そこには予測通り平井が座っていた。

「あ、キャプテン。チャーツス」少し元気が無いように見えるが、あえてそれには突っ込まずに隣に座る。

「どうした？お前は焼肉行かないのか？」さつき声をかけてきた奴らは平井と仲が良い連中だ。

「え？ああ、イヤ、今日は行きたくねーんすよ」やはりいつものテンションが無い。

まあ、原因は明白だが。

当然、「アイツ等に負けたのがそんなに悔しいのか？」そう聞いた瞬間、

ビクッ！と体が反応した。分かりやすい奴だ。

成沢風に言わせてもらえば、自分に正直で素直だと言う事だろう。

「そ、そんな訳ねーツスよ。別にあんなの偶然ツス。次は勝てるツスよ」

「……セリフ面はやる気に満ち溢れているようだが、言い方

とイントネーションが情けない。

「はあ、お前は・・・」言いかけて止めた。どうせならもつと効果的に言った方が良くと思ったからだ。

「そうだ、お前腹減って無いか？」

「え？イヤ、別に大丈夫」奢ってやるから行こうぜ」・・・了解ッス」多少強引だが店に行く事にした。

まあ、これで当初の予定通りだ。

「じゃあ、早速行こうぜ。平井、早く着替えて来い」

目の前では肉が焼けている。

「どうした？食わないのか？別に奢りだからって遠慮する事無いんだぞ」さつきから箸に手をつけようとしない。

「・・・食べるツスよ」やっと箸に手をつけた。

「で、何でお前はそんなに落ち込んでるんだ？」

「別に落ち込んでなんかいないーツスよ」・・・どう見ても落ち込んでるけどな。

「まあ、それなら良いけど何が気に食わないんだ」負けたのが悔しいのは分かるが、そんなに落ち込むほどの事では無いはずだ。

「だから、別に何でも無いツス」

ハア、これは大分骨が折れそうだ。

「そうか、まあ食え」とりあえず今は飯を食おう。

しばらく飯を食べ続けた。

もう二人とも腹いっぱいになり時間もかなり経った。

「なあ、お前が気に食わないのはアイツ等がふざけてると思ってるからだろ？」

急に切り出してみたが、凶星だったようで。

「な、何を。そ、んな訳無いツス」そうは言っても目が泳いでるけどな。

「隠す必要は無い。去年の俺もそうだったからな。お前は成沢達が何の努力もせずに威張って、勝ったから嫌な気分なんだろ？」

「そうツスけど・・・キャプテンもそうだったんスか？」

「ああ。でもな・・・」直接見た方が話が早い。・・・時間もちょうど良いしな。

「じゃ、行くぞ」荷物を持って立ち上がる。

「え？何処にいくんスか？」

「良いから黙ってついて来い」

そのまま二人で店を出た。

＼春樹side＼

球場に着いた。

「よし、着いたな。お前等準備しろ」後ろを向いて全員に言う。・・・あれ？

「花凛は？何処に行ったんだアイツ？」

「川柳は帰った」

「は？アイツが帰る訳ないだろ」運動大好きの花凛なのにそれは無いはずだ。

「あのな？成沢、この世には触れてはいけない話題つてのがあるん

だ」

触れてはいけない話題・・・？

「・・・その顔は納得してないな」

「え？イヤ別にそんな事は無いぞ？」声が裏返った・・・。

「仕方ない、教えてやろう。」

最近川柳は暴走しすぎていたから作者が出場禁止を出した」

・・・ん？

何か意味が分からない事を言われた気がする。

「最近暴走しすぎだから？出場禁止？」・・・分からん。

「そうだ。ここ最近は特に欲望をさらけ出していたからな。

作者がこれはマズイと思ったんだろう」

・・・分からない。全く。

・・・ま、良いか。

「ちなみにこの回と次の回は出られないからな」

・・・さいですか。もうどうでも良い。

「じゃ、準備するか」

何か変な予感を抱きながら、俺達は準備を開始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277m/>

SSC ~ School Support Club ~

2010年11月27日10時29分発行